

開催地名	和歌山県 由良町
開催日時	令和6年12月16日(月)13:30～15:00
開催場所	由良町役場3階大会議室
語り部	臼井 久(山梨県都留市)
参加者	由良町自主防災会協議会 会員及び事務局 計20名
開催経緯	地域の防災意識向上及び取組強化につなげるため、由良町の各自主防災会会長で構成された協議会において、全国の自主防災組織の活動事例について学ぶ機会を検討していた。
内容	■ 与縄地区防災計画推進会のあゆみ ～地域から一人の犠牲者も出さないために～ 山梨県都留市与縄地区において、防災計画推進会の会長を務める立場から、これまでの取り組みについて紹介する。これは、私たちの地域に根差した活動の話となるが、今後の防災の参考として共有したい。 私たちは「一人の犠牲者も出さない」ことを目標に、防災訓練をはじめとするさまざまな取り組みを行ってきた。その活動が評価され、消防庁長官賞を受賞し、首相官邸で表彰を受けるに至った。しかし、消火器の使用訓練だけで終わるものではなく、地域の特性に合わせた創意工夫を加え、より実践的な訓練を行うことを意識しながら10年間活動を継続している。 与縄地区は、富士山や富士急ハイランドに近い山梨県都留市に位置し、人口は約28,000人から29,000人。リニア実験線が走る街としても知られている。都留市は、事故やけがを防ぐ「セーフコミュニティ」活動を推進しており、国際認証センターから県内初、日本で17番目に認証された。これは、防災・減災、交通安全、防犯対策、心のケアなど、地域の安全を総合的に高めることを目的とした取り組みである。 ■ セーフコミュニティの取り組みと地域防災 防災情報の発信手段として、私たちは公式LINEアカウントを活用し、リアルタイムで災害情報を住民に提供している。令和5年12月には、都留市立病院の医師や住民とともに防災訓練を実施し、その様子が地方紙にも取り上げられた。これは、行政では実施しにくいような実践的な訓練を、地域住民自らが工夫しながら行うものである。 また、私は昭和57年に消防団へ入団し、30年にわたり活動を続けてきた。その間、台風被害、東日本大震災、隣家の全焼火災、山梨県内での大雪災害など、多くの災害に直面してきた。南海トラフ地震や津波が懸念される地域の皆さんとは異なり、私たちの地域では地震や土砂災害への備えが特に求められる。地域の地形や環境に応じた対策が必要であり、「まだ十分にできていない」という意識を持ちながら、さらなる防災強化に取り組んでいる。 ■ 地域防災計画推進会の発足と訓練の工夫 2015年に与縄地区防災計画推進会を発足させ、3つの小さな自治体が1つの避難所を共有する形で活動を開始した。しかし、自治会長や自主防災会会長が毎年交代するため、防災訓練の継続性に課題があった。そこで、自治会の会長らを巻き込みながら組織を強化し、現在では120軒のうち4名の防災士と11名の避難所運営リーダーが協力して運営に当たっている。 地域の災害リスクを把握するため、市から配布されたハザードマップを活用しながら、地域独自の防災計画書を作成。資料は毎年更新し、より実践的な内容にするため工夫を重ねている。主な内容は以下の通りである。 - 災害時の対応マニュアル - 拡大版ハザードマップの作成 地域住民が各自の家の位置を確認できるよう、大判サイズで作成。 - 与縄地区独自の防災マップ 土砂災害警戒区域や特別警戒区域を明示し、地域住民が危険区域を把握できるようにした。 - 災害伝言ダイヤルカードの配布 硬めの紙に印刷し、若年層にも携帯しやすいカード形式にした。 - 訓練用シナリオの作成 訓練ごとに異なるあらすじを用意し、現実的なシナリオをもとに演習を行う。 - 白色タオル運動

安否確認の一環として、玄関に白いタオルを掲げることで「無事」を知らせる。

- 通電火災対策

一時避難時にコンセントにシールを貼る習慣を促し、通電火災を防ぐ。

また、地域の降水量記録を独自に収集し、市の公式発表との比較を行っている。これにより、テレビや新聞では報じられない地域特有の情報を得ることができる。さらに、LINE公式アカウント「Yアラート」を通じて、住民にリアルタイムで情報を提供し、災害に対する意識を高める取り組みも進めている。

■ 互いを思いやる社会へ

防災訓練では、DMAT(災害派遣医療チーム)の医師と協力し、リアルな救護訓練を実施。実際の避難生活を想定し、防災テントの設営や仮設トイレのレイアウト工夫なども行った。特にトイレは、犯罪抑止のため星型に配置し、明るく安全に使用できるよう配慮した。また、炊き出し訓練では防災かまどを活用し、地域住民が楽しみながら学べる環境を整えた。

避難訓練の一環として、起震車による震度7の体験も実施し、地震の衝撃を実感してもらった。こうした実践的な訓練を重ねることで、住民一人ひとりが具体的な行動をイメージできるようにしている。

また、住民が行政に働きかけることで、山道の補修や電柱の傾斜修正などの防災対策が実現した。この成功体験は、地域の自主防災力向上に大きく貢献し、「自主防災会でもできる」という意識を広めるきっかけとなった。

防災の基本は、日常的な「おはよう」「こんにちは」「元気？」といった挨拶から始まると考えている。地域のつながりが強ければ、災害時の助け合いもスムーズに行える。防災は一人ではできない。訓練したことしか実際にはできないからこそ、継続的な防災活動が不可欠である。

私たちコアメンバーは「次に何をしようか」と考えながら、楽しみながら活動を続けている。この取り組みが、他の地域の防災活動にも参考になれば幸いである。



開催地より

今後、町内防災士資格取得者への自主防災活動参加呼びかけや町内各地独自の防災訓練実施につなげていきたい。